

# 博士論文（要約）

明治・清末の哲学言説と「批評」  
——井上哲次郎、大西祝、章炳麟

郭 馳洋

## 目次

凡例	11
序章	12
第一節 問題意識	12
第二節 先行研究	25
第三節 視点と方法	37
第四節 本論の構成と各章の内容	42
第一部	47
第一章 井上哲次郎の現象即實在論における表象の政治	48
はじめに	48
第一節 現象即實在論の登場	49
第二節 現象即實在論の思惟様式	52
第三節 實在と言語：表象不可能なものをめぐって	57
第四節 哲学論と宗教論の連関	62
第五節 實在の内面化：神を手なずける哲学	68
小括	81
第二章 井上哲次郎の大我小我論と「平等」の逆説	84
はじめに	84
第一節 現象即實在論における個体主義批判の論証	85
第二節 政治思想としての大我小我論	92
第三節 「平等」概念のアポリア	100
第四節 大我小我論と東アジアの近代思想	105
小括	112
第二部	115
第三章 大西祝の批評論と目的論的良心論	116
はじめに	116
第一節 批評論の成立と内容	118
第二節 批評論の性格	121
第三節 批評から倫理へ	127
第四節 良心の起源に関する諸説の吟味	132
第五節 目的論的良心論の構造	136
小括	143
附論 良心論と文芸論	144
第四章 大西祝における「忠孝」と「国家」	149

はじめに	149
第一節 明治中期のイデオロギー	149
第二節 「忠孝」をめぐる攻防	151
第三節 国家観と国家主義批判	159
小括	166
第五章 大西祝の制度論と「批評」	169
はじめに	169
第一節 法・倫理・革命	169
第二節 目的論哲学と制度論	175
第三節 言語と宗教	186
第四節 宗教と社会主義	193
小括	202
附論 大西祝における「遊離」の美学	203
第一節 「必要に根ざしたる遊び事」	203
第二節 「遊離」と「観美の境」	204
第六章 近代日本における哲学としての批評論：大西祝から戸坂潤へ	210
はじめに	210
第一節 「批評」の成立と大西祝の批評論	211
第二節 明治後期と大正期における文明批評・文化主義	215
第三節 戸坂潤の批評論（１）：「文芸批評」から「科学的批評」へ	217
第四節 戸坂潤の批評論（２）：批評と認識	222
小括	227
第三部	229
第七章 章炳麟の『荀子』解釈と「名」の形成	230
はじめに	230
第一節 清代の荀子論と章炳麟の荀子評価	232
第二節 桑木厳翼「荀子の論理説」における「認識論的論理学」	234
第三節 章炳麟「論諸子學」における『荀子』正名篇解釈	237
第四節 章炳麟「原名」における『荀子』正名篇解釈	241
第五節 章炳麟「明見」における『荀子』解蔽篇解釈	243
小括	248
第八章 章炳麟の宗教観と明治日本の哲学・宗教言説	251
はじめに	251
第一節 章炳麟の宗教観と明治中後期の理想主義	252
第二節 章炳麟の惟神論批判	257
第三節 章炳麟における「神」と「名」：宗教批判の到達点	266

小括	272
第九章 章炳麟の言語—本体論と批評	275
はじめに	275
第一節 本体と表象	275
第二節 「以名遣名」：言説の極限に迫る	280
第三節 空白を埋めるもの	284
小括	290
終章	293
第一節 本論文の成果	293
第二節 今後の課題	299
参考文献	302

本論文は序章、本論、終章から構成されている。本論は三つの部分に分かれ、第一章と第二章は第一部で、井上哲次郎を論じる。第三章から第六章までは第二部で、第三～五章は大西祝を扱い、第六章では戸坂潤を取り上げる。第七章から第九章までは第三部で、章炳麟について考察する。

第一章では井上哲次郎の現象即實在論と倫理的宗教観に焦点をあててその批評性の様相と限界を考察した。井上の議論では宗教の単独性・神秘性が削ぎ落され、諸宗教・諸哲学は「實在」の表象として同じ平面に配置されている。しかし批評の根拠となる實在それ自体は分別知で認識できないもので、内面の大我の声によってしか接近できないものとなっている。第二章では井上の大我小我論とその政治思想、社会観を考察し、清末中国の万物一体論も視野に入れた。現象即實在論に基づいた大我小我論は個体主義批判の原理として祖先崇拜思想と家族国家観を根拠づけるものであるとともに、井上の社会観でも機能している。そこでは物質的な「平等」でなく内面の「大我」の平等が説かれている。

第三章では大西祝の批評論と良心論に注目し、彼の思想で「批評」という原理がいかに関

すでにのちの良心論の問題系を含んでいる。主著『良心起原論』ではあらゆる権威を批評しうる良心を基礎づけるために、一種の目的論哲学が提起されている。第四章は「批評」の先鋭的な表れとして大西の忠孝論と国家観を分析し、目的論哲学との関連にも言及した。忠孝という徳目を唱えた教育勅語解釈に対して大西は言葉の意味の決定不可能性に着目し「忠孝」が道德の根本原理になることを否定する。一方で目的論哲学に依拠して国家を「目的」実現のための「倫理的機関」と位置づけている。第五章では大西の制度論と目的論の連関について論じた。表象＝代表の不可能性を強調した大西の制度論において法と良心の緊張関係および革命観、「制度」と「理想」の弁証法的な関係が語られて、その前提として目的論的な自然観・活物観がある。それが言語観、宗教論、さらに社会組織の改造を目指した社会主義論に結びつく。第六章は明治以降の原理論的な批評論について戸坂潤を中心に考察した。マルクス主義者として知られる戸坂は、明治後期以来の文明批評・文化主義を批判的に受容したうえ、狭義の文芸批評を批判し、「アカデミズムとジャーナリズム」という構図の下で批評論を展開し、さらに批評を物事の印象を言葉に翻訳する営為と捉え直した。

第七章では桑木厳翼の「荀子の論理説」という文章を手がかりに章炳麟の荀子解釈を考察した。唯識論を用いた章の荀子解釈において「心」は意識と臆識（阿頼耶識）の複合体となっている。心は五官との協働作用で名称を形成するが、名称が捉えるのは差異的な理であって道そのものではなく、道と名との距離はほかならぬ心において構造化されている。第八章では井上の議論との関連を踏まえつつ、宗教に対する章炳麟の批判的省察を論じた。章は中国の無神論の系譜を描き出して識に依拠する宗教の樹立を提唱する。諸哲学・宗教を同列に置く概念装置を使い、宗教を合理的に理解し倫理化する点で井上と共通するが、章にとって道德は内的大我との合一ではなく革命の実践において完成する。第九章では章炳麟の言語一本体論を分析し、章における「批評」の構造をさらに解明した。章の批評とは「以名遣名」という方法で言語の限界を明らかにして批評不可能な本体に到達したものである。言語と本体（名と道）は分離するとともに媒介されている。この距離は名の解放につながり、言葉で構築された秩序への批判的な態度を可能にする。

以上、本論文は明治哲学を主に西田哲学と関連づけた従来の日本哲学史叙述を相対化し、明治中後期の哲学言説を同時代の言論空間および中国哲学との関係において再考した。それは同時に章炳麟のような清末知識人の思想の再把握につながった。さらに、これまで文学研究・文芸批評の枠内に回収されがちな批評という概念を方法論的視座かつ思想史研究の対象として賦活して、近代日本ひいては東アジアにおける「批評」の新たな語り方を模索した。